



大久保 仁
Hitoshi Okubo

世界記録に挑戦し記録更新するようなスポーツ選手は、鍛え上げられた体と研ぎ澄まされた美しいフォームを持ち合わせている。これは、単独競技の陸上や水泳だけではなく、相手のある柔道やテニス、そしてチームプレーの野球やバレーボールなどの選手でも同じである。究極にまで鍛え上げられたものは、物理的にも生理学的にも無駄が省けて美しくなっていく。しかし、それはただ美しいだけではないことに気付く。水泳でも陸上でも野球でもサッカーでも、超一流選手のそれは、無駄のない美しさに加えて“個性”が光っている。そこに多くの観衆は大きな魅力を感じるのである。

一方、技術開発の究極の姿はどうであろうか。厳しい経済状況の中で産業界のあくなき努力・競争が続き、製品の信頼性向上、コストダウン、簡素化、縮小化などが、休むことなく進められている。それは無駄を省き生産能力を向上させ、エネルギー利用率を上昇させる。また、機器や装置自身の縮小化や効率向上、使用材料の軽減化、省エネルギー化により、環境負荷を低減をすることは言うまでもない。簡素化や耐熱新材料の適用などで信頼性や寿命効率も上がり、これは非常に重要なことである。技術開発の目指す本来の姿であることは間違いない。

しかし、極限まで簡素化、縮小化を進めていくと、つまり、物理的限界、材料的限界などの科学的限界に近付くと、どの製品も同じような形、同じような作りになり、使い勝手も似てくる。いずれもよく似た類似なものになり、無味乾燥なそして無機質に見えてくるのは私だけであろうか。

家庭電化製品でも電力機器でも、一昔前のものを見ると、何ともいえない温かみを感じる。これは単なるノスタルジアだけではなく、各企業の開発の考え方(コンセプト)のようなものが伝わってくるためである。もちろん、現在の開発品に比べて効率は良くないであろうし、トータル環境適合性は必ずしも良好ではないかもしれない。技術とは、そして技術開発とは何であろうか。それは、“社会に受け入れられて使われるのが技術”の条件であり、そういう装置・機器を開発するのが技術開発である。そうであるなら、家庭電化製品であれ電力機器であれ、技術開発のコンセプトには広い意味での社会的受容性を引き出す“個性”があってほしい。換言すると、社会が求めるもの、社会のニーズを先取りした機器・装置であってほしい。これからの時代は、機器や装置の開発において、社会的受容性、すなわち環境調和、安全・安心社会への適合、不燃化、省エネルギー、経済性などのキーワードに代表される“社会的受け入れ満足度”が重視され、その限度に挑戦していくことになる。その結果、各企業の製品開発コンセプトが滲(しみ)み出て、技術開発の“個性 = Identity”が光るのである。

物理的にそして材料的に究極まで技術開発を行った中に、社会に受け入れられる個性が光った、つまりIdentityのある機器・装置の開発を望みたい。今後の受配電システムを始めとする機器技術においても、究極の姿を目指し物理的限界を見据えつつ、豊かな個性により多様な社会的受容性を得て、更なる発展を期待したい。